

# 羽咋市立粟ノ保小学校PTA研究概要

## 研究主題：学び合い育ち合う ～Touch the heart～

### 1. 主題設定の理由

日本PTA全国協議会「はじめましてPTA」によると、PTAとは「社会教育団体」であるとともに、成人教育の場であると書かれている。そこで我々は「より良い保護者・先生であるために自ら学びや研修に励むことができれば、子の成長に良い影響を及ぼすのではないか」という仮説を立てた。これが主題設定の理由であり、主題にある「学び合い」の主体である保護者や教師の研修が子供の「育ち合い」につながってほしいという願いが込められている。

また、一方で新型コロナウイルスの流行に伴い、学校の臨時休業が余儀なくされ、PTA活動も大きく制限された。そこで我々は、「コロナ禍においても、家庭・学校・地域をつなげるためにはどのようにすればよいか」という課題を通して、PTA活動を見直すことにした。そのことも主題設定のもう一つの理由である。

副題の「Touch the heart」には、現在、コロナ対策のために、簡単に手と手が触れ合えない状況下であるからこそ、家庭・学校・地域で心と心が触れ合うような活動を見出していきたいという願いが込められている。

### 2. 研究実践

#### (1) オンライン等を活用した保護者研修

コロナ対策等によりPTAの活動が制限された中で、保護者による研修を行ってきた。

4月当初にPTA役員同士で話し合ってみると、子育てについて多くの悩みがあり、それぞれ特に誰かに相談するわけでもなく、それぞれの家庭で自己流の方法を取っているということが分かった。特に「子どものやる気と親のかかわり方」については、どの親にとっても共通の悩みであるということ共有でき、年間を通じて、このテーマを中心に保護者で学び合っているということを共通理解した。

まず、第1回目の研修では、学校に集合し、保護者と教員により子育てに関する動画を鑑賞し、それぞれの子育てを振り返りながら話し合う時間や先生方の経験談を聞く時間を設定することで、それぞれの家庭での子育てに生かす研

修を行うことができた。

しかしながら、すぐにコロナウイルスの影響でPTA活動が制限され、実際に

集合した研修を行うことができなくなってしまった。そこで、小規模校であり保護者が少ないというスモールメリットを生かして、Lineグループを作成し、グループ内にYouTubeの動画をリンクさせ、互いが同じ動画を鑑賞することができるようにした。動画は、子育てに関する動画を中心にしたが、コロナ禍ということもあり、病気予防や健康に関する動画も共有していった。Lineグループでは、鑑賞後にお互いの感想を書き込み、そこからさらに学びが深まることもあった。

しかし、Lineグループでの研修だけでは、多くの保護者を巻き込んだ学びへつなげることは難しいため、全保護者を対象に広げた研修会を開くことを企画した。9月25日に行われた授業参観後の6限目に、「子どものやる気と親のかかわり方」をテーマにした講演会を行った。講師は、金沢大学人文学類心理学コースの荒木准教授に依頼した。しかも今回は、コロナ対策のため、実際に来校していただくのではなく、



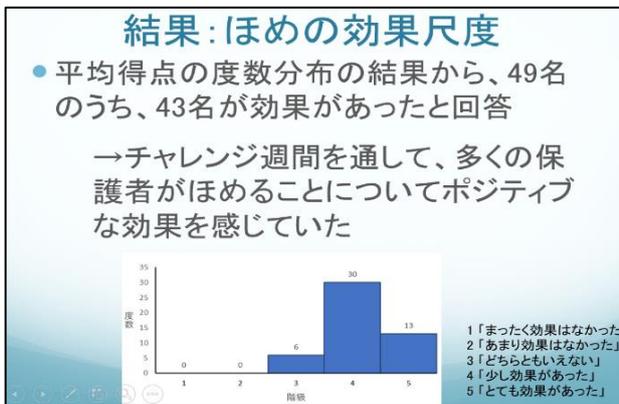
資料2: 保護者参加による研修会



資料1: 動画を活用した自主研修

スライドにナレーションを入れ事前収録した動画と、オンライン会議システムによる質疑応答という金沢大学からライブ配信を併用しながら、我々の子育ての悩みを心理学の立場からアドバイスしていただいた。

講演後に取り組んだ「声かけチャレンジ週間」では、荒木准教授からアドバイスいただいたことを全家庭で取り組むことにした。このチャレンジ週間には、「褒め上手」「整え上手」「伝え上手」「聴き上手」の4項目を盛り込んだチェックカードを用意した。チャレンジ前後のアンケートから、以下のような結果が得られた。



資料3: 声かけチャレンジ週間アンケートの分析 (協力：金沢大学 荒木准教授)

このことから、心理学的な視点が子育てにより良い影響を与えたことがわかるとともに、保護者が子育てについて高い意識をもって実践に取り組んだことがわかる。

これらの実践を通して、「より良い保護者・先生であるために自ら学びや研修に励むことができれば、子の成長に良い影響を及ぼすのではないか」という仮説に迫り、より良い成果を生むことができた。このことから、次年度以降もPTA活動における保護者自身の研修の重要性を認識し、年間計画の中に十分に盛り込んでいくべきであるということが結論付けられる。

## (2) コロナ禍における家庭・学校・地域の連携

コロナウイルスの蔓延から、学校行事やPTAの活動が次々と延期や中止になり、児童の様々な経験の場が奪われるとともに、それらを通じた他の保護者や地域との関わりがもてないという状況が生まれた。

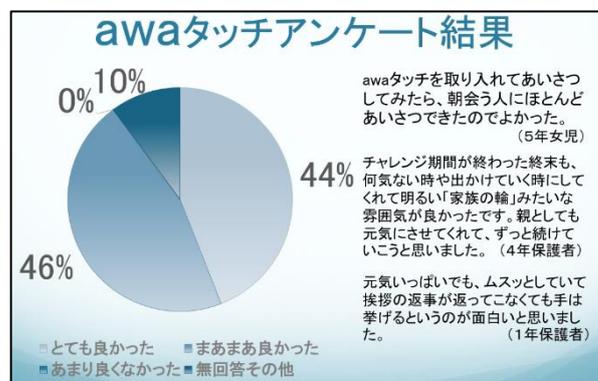
我々はかねてから、「栗ノ保小は小さい学校であるからこそ、親同士が今以上に親しくなり、地域の子ども達も自分の子どものように見守っていけるようにしたい」と考え、役員同士の親睦を深めるツールとして、ハイタッチを取り入れてきた。そこで、この状況下においても、ハイタッチを家庭・学校・地域で取り入れていけば、マスクをしていて表情すらわかりにくくなってしまった中でも、つながりを深めることが

できるのではないかと考えた。

そこで、六年生に「awaタッチ」という愛称を付けてもらい、毎朝親子でハイタッチを行ってから登校する「awaタッチA」を7月中旬の一週間行った。取組後のアンケートでは、以下のような回答が得られた。



資料4: awa タッチ啓発ポスター



資料5: awa タッチ毎朝チャレンジ後のアンケート分析

また、学校の先生や見守り隊の方々にも手と手を合わせないハイタッチ「awaタッチB・C」の協力を依頼したところ、「以前より子どもとの距離がとても縮まった」「以前より挨拶しやすい」という肯定的な感想が多く聞かれた。

今後も学校や地域と協力しながら、栗ノ保の「awaタッチ」が地域全体をつなげる挨拶になるようPTAとして取り組んでいきたい。

## 3. 研究を終えて

本校は、過疎化が進む能登の小規模校の一つであるが、意外にも地元育ちの会員は少ない。そのため、PTAに参加しているにもかかわらず、お互いをよく知らないという課題があった。

だが、本研究を通して悩みを共有し、お互いをよく理解し合う中で、コロナ禍にもかかわらず、どうやったら研究を推進できるかと前向きに活動し、会員同士が深くつながりをもてたことは、我々の最大の収穫であった。

しかし今は、まず第一にコロナ禍が収束し、子ども達の安心安全な生活ができる限り早く戻ってくることを願ってやまない。